

は横に少しばかり際を付たる又流行たり、

〔浪花の風〕髪の結様は、其時の流行もありて、一定ならずといへども、文政の頃より、大かた今の風俗のよしなり、其さまたばを長く垂る様に出して、其上へまげは六かしげに作りたるものにて、多くはまげといふものは、假ものにして、自髪にはあらず、一體の結様は、殊に六かしき故、中々容易に一人にては結ひ難く、夫故髪を結ふことは、多くとも一ヶ月に三度には過ず、よく保たするものは、十六七日づゝは保たするといふ、

〔燕石雜誌三〕わがをる町

婦女子の髪を結ふ事なども、予澤○瀧が幼稚き比は、小頭坐コウカクラを入れて、根をひとつにして、髪と鬘ビロをかき出し、鬘入といふものを入れて、鬘を長くしたれど、今のごとく、鬘挿ビロサといふものはなかりき、その後髪の結ぎま、大に變りて、少女も老女も鬘と鬘を別にとりて、紙張コバなる鬘の形またるもの、鬘の形またる物を入れ、市中の女子は、前髪を短くして、刷毛の如く上へかきあげておく事になりつ、

〔諺話浮世風呂二編上〕朝湯より晝前のありさま

已アイサ、みんな摘鬘ていさでございました、それがおまへさん鬘挿だの張籠だのと、調法なことになりました、獨手に髪が結はれます、あの島田くづしの形などは、役者の鬘同然さ、頭へ乗せさへすれば、手つかずに鬘が出来る、イヤハヤ利口な事さ子辰、一頻は、頭の上へ鬘がおつかぶさつて居ましたが、又むかしへ歸つて、些ばかり貰て來たほどの島田になりました、その上に上方風を好このむものも出て參ります、ホンニホンニ移り氣なものでございませうね、已京形だの、京かんざしだのと、何でも珍しい事を好みます、お江戸の人は、お江戸の風が、いつまでも能うございませうよ、